

## 尽きることのない怖れ ―憑依霊の事例―

医学博士 ロバート・G・ジャーモン ( Robert G. Jarmon. M.D. )

☆

『魂の発見(Discovering the Soul)』の著者である、ロバート・G・ジャーモン博士はニュージャージー州のスプリング・レイクの精神科医です。

☆

霊的な治療といわれる分野の中には、憑依霊として知られている考え方があります。その理論によると、ある人物が亡くなり、霊ないしは魂のエネルギーが肉体から去ると、普通は光の中へと戻っていくものなのですが、時として光へと戻っていかないことがあるというのです。その理由は様々です。全く予想外の死が突然に訪れ、霊が肉体の死に気がついていない場合があります。

また霊の方が光を怖れてしまうということがあるのですが、それはその時の受肉の体験があまりにひどいものであったため、一体性、つまりワンネスへと再び戻るには自分は値しない者であると霊が考えてしまうからです。その他、霊が成仏できない原因としては、この地球上でやり残したことがあるという強い気持ちがある場合などがあります。

これらはすべて、非現実的に思われ、具体性にも乏しく、精神療法（心理療法）においてさえも滅多に取り上げられることはありません。精神療法とは患者の魂を治療しようとするものであり、その方法論には世の中に受け入れられているとは言い難いものもあるのですが、そのような精神療法においてさえ、そうなのです（ジャーモン・R、『魂の発見』、1997年 ARE 出版、参照のこと）。

私でさえ、憑依した霊を解き放つ、といった治療に関わり合いたいとは思っていませんでした。除霊などについて、十分な知識すらありませんし、その治療においては、一体何が生じているのかも分からず、正直なところ、その治療過程は何か「薄気味悪いもの」と思っていたのです。

私は医師の資格を持ち、それゆえ自分の患者から得た臨床観察上の情報については、定期的に他の医師と交換するのを常としています。医師が報告する内容とは、呼吸音や心臓の雑音、皮膚の肌理(キメ)などの質と内容・・・といった身体的な所見になります。

さてここで、このような所見の形式の範囲内には留まるものの、ちょっと奇妙な事例を以下に報告しましょう。

事例について、それが一体誰であるのかを特定されることがないように、患者の背景については変更を加えた箇所があります。

実際に生じたことについて述べるのですが、この事例が何を意味しているのか、それについては読者の判断に委ねたいと考えます。

☆

サラはとても愛想が良く、肥満した体格の持ち主で、離婚経験のある48歳の歴史の教師でした。彼女はアーカンソー州の奥地で養鶏と養豚の小さな農場を経営する極貧の家庭で育ちました。18歳の時、母親がくれた250ドルを手に、東海岸行きのバスに乗ったのですが、それは彼女を虐待する悪魔のような父親の手から逃れ、自分の人生の再建を図るためでした。

その後の5年間の間に、彼女の姉妹は精神病を患い、以降回復することはありませんでした。また彼女の兄弟は自らの口の中に銃口を入れ発砲して自殺しています。その上、彼女の母親は大量服薬で自殺を図り、それは未遂に終わったものの、次にはガソリンを被り、焼身自殺したのです。

サラのかかりつけの内科医は、太りすぎた100ポンドの過体重について、その減量を手伝うようにと私のところに彼女を寄こしました。彼女は内科医には話さなかったことを私に打ち明けましたが、それは彼女が7年に渡って断続的に治療を受けていたにも関わらず、結局その精神療法は彼女の漠然とした不安感を取り去ってはくれなかったということでした。

彼女は快活そうな様子を見せてはいたものの、本質的なところについてはとても防衛的で、秘密主義的な面があることは明らかでした。治療によって最後には事の核心に至りたいと告白するものの、彼女はプライベートなことに関してはなかなか明らかにせず、私の方は、以前の治療が彼女にとってどれほどフラストレーションの溜まるものであったのだろうか、思いを巡らさずにはられませんでした。

続く2～3ヶ月の間に彼女の私に対する信頼感は増していき、家族を支配した父親の恐怖を思い出し、それを私と共有してくれるようになりました。この時には、なんとか45ポンド減量を果たしています。それからその後は行き詰まってしまったように思えました。

彼女は姉妹が父親から近親相姦されていたことを知っており、サラ自身も父親から性的な虐待を受けていたと思われる明白な徴候があったにも関わらず、彼女はそのような記憶や意識はないと言うのでし

た。

抑圧された記憶を引き出す目的で、催眠を試してみたのですが、そうすると必ず彼女の心は催眠過程に抵抗するのです。

その後再び催眠誘導を試みた際、彼女が不意に口にしたのは、「彼はこれまでで一番の、最高のセックスしてくれたわ」という言葉でした。

私は彼女に一体何が起こったのかについて、説明を求めたのですが、彼女はたった今自分が話したことさえ否定し、彼女に取り憑いた呪文のようなものを振り払うかのように振る舞いました。

「父は嫌がっています。」と彼女は言うのです。

そこで私は、彼女の父親はすでに亡くなっているということを思い出させようと思いました。

彼は15年も前に亡くなっており、その時彼女は、病床で看病していたのです。

彼女が以前話したことには、父が死の間際、彼女に手を伸ばして、「もう一度お前に世話してもらいたいんだ」と語った、というものがありました。

「あなたの父親はもうあなたに影響を及ぼすことはないし、危害を加えることはできないんだよ。彼はもうすでに亡くなっているんだ。

彼が亡くなったとき、あなたはそこにいたし、葬儀にも参列し、墓参りにも行ったはずだ。

あの男も、彼の恐怖ももう去ったんだ。

過去は過ぎ去り、あなたは恐れから逃れ、生き残ったんだ」と私は話しました。

「いいえ、彼は今も私を邪魔してる」と彼女は言い張ります。

「そんなこと、あるはずがないってことは分かるでしょう。

臨終の床を思い出してみてください。

その男は亡くなり、永遠に戻ってくることはありません。

彼は、あなたにも、他の誰にだって手は出せないのです。

すべては終わったんです」と私は言いました。

「違います、ジャーモン先生。

父は今もここにいて、私を邪魔しているんです。

私怖いです」。

それから私が自分の言い分が正しいと、再び主張したときに突然、荒々しくも力強い男の声がしたのです。

それは、私のオフィスにあるテープレコーダーのスピーカーから流れてきたのです。

うまく表現できないのですが、その声は怒りに満ちた、耳障りなうなり声のようであり、それが私たち二人を驚かせたのです。

「あれは何？」と彼女はイスから飛び上がって言いました。  
私はできるだけ冷静を装い、「さあ、何ですかね？ でも気にすることはないですよ」と答えました。  
とはいえ、私はすぐにテープレコーダーのスピーカーへと向かっていき、スイッチを切りました。

確かに私はスピーカーシステムの電源を入れてウォームアップしておいたのですが、テープを回してはいなかったのです（もちろん今では、あの時テープを回しておけば良かった、と思うのですが）。

私たちはすぐにその日のセッションを終わりにし、私は彼女と話し合うことにしました。  
話し合った内容は、ウィリアム・ボールドウィン博士(Dr. William Baldwin)の退行療法、『霊解放療法 (Spirit release therapy)』（ベテル出版 Bethel Publications, 1992）や、エディス・フィオレ博士 (Dr. Edith Fiore)の『心落ち着かぬ死者(The Unquiet Dead)』（Doubleday/Dolphin, ダブルディ/ドルフィン社、1987）、そしてアイリーン・ヒックマン博士(Dr. Irene Hickman)の『遠隔除霊(Remote Depossession)』（ヒックマン・システムズ Hickman Systems, 1994）などの中で取り上げられている憑依霊という考え方についてです。  
サラは、もうそろそろ良くなれないといけない、自分が自由になれるのなら何でもする、と言うのでした。

#### ☆

私たちは翌週に2時間のセッションを計画しました。  
憑依した霊を解放する過程は、簡単に述べると、次の通りです。  
肉体から去った霊に対し、もはやその霊は自分の肉体を持っていないということを告げ知らせ、最終的にそれを口に出して言うことを勧め、光の中にこそその霊の存在する場所があり、たとえ最悪の霊でも光へと戻ることができ、その中で愛され、存在することができることを保証するのです。

そのセッションの終わりにサラは、とても大きな重荷が軽減したように感じて「何かが自分の体から流れ出ていったみたいです」と語りました。  
それは彼女の一部となって久しかったため、それが彼女から去ったことに一抹の寂しさを伴わないではなかったのです（これは憑依された人の典型的な反応です）。

私は日々行うべき情緒的、霊的なエクササイズを教えたのですが、それは愛の光が彼女の周囲と内側で輝くところを視覚的にイメージするもので、そうすることによって、アースをして浄化を促すというものです。

その後の数ヶ月で、子ども時代の抑圧された記憶を意識に上らせることができるようになり、彼女が置き間違えていた感情を正しいところへ、すなわち彼女の生活史の中の然るべき場所へと収めることができるようになりました。

彼女の減量計画は継続中でしたが、漠然とした不安感、及び男性への不信感は基本的に消失したので

した。

<2001年1、2月号より>